

社会史の今日的課題(一)

百 木 英 明

「社会学の分野からでなく、歴史学の分野から」最近、社会現象の性格を示すような勢いで、中世・ヨーロッパの文献の翻訳を中心とする〈社会史〉が流行っている。同時に、社会史の研究領域の拡大と共に、歴史学より、社会学、文化人類学、心理学、民族学等との交流の必要がさげばれている状況にある。⁽²⁾こうした動きは、我々社会学研究を志す者にとっても無関心ではいられない。なぜなら、C・W・ミルズの「歴史が提供する多様性は、社会学的な問題に答えるためよりもむしろ、問題を正しく設定するためにも必要な⁽³⁾だ」を引用するまでもなく、構造論・変動論その他において、歴史への視角の必要性が要求されているからである。そこで、いかに社会学と社会史の架橋が可能であるかを考察することが本稿の主題といえる。ここでは、社会史の傾向を整理して後につなぐ問題点を提示したい。

(一)

ところで、本来人間は、歴史と社会によって自己を形成し、歴史と社会を一主体者として形成するものである。それ故、社会の中に歴史は内包されているのに、なぜ社会史が叫ばれているのか。

〈社会史〉の言葉を素直に見て取ると、二通りの解釈が可能となる。その一つが、今までの歴史を内包された社会に、更に史を加えることの意味。それは、新たな、別の角度からなる歴

史を加味する（よりダイナミックな視点ということか？）ことである。反対に、歴史が欠落してしまい、改めて史を加えなければならない状況によるものとの解釈が可能である。その一方で、あたりまえとされてきた「社会」が欠落してしまい、今改めて、社会を見直し、従来の考え方、方法に対し批判を加え、新たな目標をいかに設定し、その目標にどのように辿り着くかとしての「社会史」との解釈が可能となる。そのためには、前提として、今日の状況（社会的背景）を把握しておく必要がある。

1945年の敗戦から今日に至る過程において、〈非社会化〉＝〈共同性の喪失〉〈非人間化〉と〈脱歴史化〉といわれる状況が確認できる。そこでは、社会をトータルに把握するイメージとして、様々な形容がなされてきた。1940年代後半の脱亜入欧を目指し、西欧文明をモデルに追求してきた「近代化社会」。更に、「大衆社会」「情報社会」「脱工業化社会」「管理社会」等である。この過程において、人間は、対人接触が少なくなり、アトム化し、アトム化されることを用意され、管理される状況へと追い遣られてきた。中でも1960年代の高度経済成長下においては、市場経済の原理に従って、あらゆるものが商品の対象となり、商品化され、更に貨幣による媒介を通じ、人間と人間との間にモノが介在するようになってきた。その商品も、規格化された大量生産によるものであり、購買の際も、消費者の好みよりも、作られた画一的な

ものの選択肢であった。同時に、日常生活の空間に、耐久電化製品を主とする商品がすえつけられるようになってきた。その結果、今日では著しく〈同質化⁽⁵⁾〉が進行し、90%が中流といわれる日常生活感覚を持つまでに到り、個性的といわれる若者のファッションにも「作られた個性による個性化」の現象を呈するようになってきた。この様な結果が、『現代日本人の意識構造⁽⁶⁾』にあらわれている。

ここでは、1973年、78年、83年の5年間隔で、世論の比較、分析をしているが、この調査結果から現在の日本人全体としての趨勢をみてとると、より身近な人間関係によるなごやかな生活を志向している結果がでている。73年には、現在志向と未来志向とが拮抗していたのに対し、83年では6対4の比で現在志向の増大となっている。快楽・愛といった感性的なものが、正義などの理性的なものを上まわっているとしている。高度成長期に馬車馬のように働き、働きバチとも言われた日本人も仕事志向が減って、仕事・余暇の両立志向が増えたとしている。「神」「仏」信仰は10代後半と20代の若者で増大し、政治への関心は低下し、政治への有効性感覚も8割程の人が「弱い」とする減少傾向にあることを示している。家計貯蓄率においても、欧米先進諸国の10%に対して、日本の19.8%の高率であることを指摘している。更に又、家族の団らんに充実感を持つ人々が減少しているとも指摘している。

このような傾向からみてとれることは、高度成長以降のモノの豊かさから低成長の今日へと繋がる過程で、非政治的な意識を増大させ、明日への不安を感じながら、やっと手にした現在の生活を、神仏を信じ、貯蓄に精を出しながら、なんとか維持したいと願う姿が現われているといえる。人間として“家族”の中に生まれ、家族と共に生活し、家族から離れていくライフ

サイクルの基本的生活の場としての家庭でも、単身赴任による妻の自殺、又、その夫の自殺など、従属変数として危機に直面している状況がある。職場においても、OA化・ME化が進み、合理化が進展する中で、非人間化が進行している状況といえる。又、行政改革による公共的事業の廃止、核による脅威や自然・生活環境の大規模な破壊と汚染の進行等、社会問題が多出している状況である。そして、高度に管理化された現代社会での閉塞状況への反発をモノで満たしながら、喪失した人と人の絆、人と自然の結びつき、主体的な労働の回復といった人間の基本的願望が、未来への展望が難しい中で、マイナーな領域への共鳴、非管理的な中世社会への関心としての今日の〈社会史〉ブームをもたらした背景があるといえる。

(二)

その中世史研究に積極的に取り組んでいる研究者としては、西洋史では阿部謹也氏、日本史では網野善彦氏があげられる。

「いわゆる民衆史を中心にすえた社会史なるものは、これまでの法制史、政治史、経済史研究等の単なる延長線上にあるのではない⁽⁷⁾」とし、『ハーメルンの笛吹き男』において伝説の背景を民衆の心性の奥深くまで辿って行った阿部謹也氏の視点を検討してみる。

阿部氏は、『ヨーロッパ原点への旅⁽⁸⁾』において、氏のモチーフとして近代と前近代、日本とヨーロッパの違いを、時間・空間・人と人との関係の三つの違いについて論じている。時間については、日本の日常生活において、近代的時間意識、物理的時間意識に抵抗する姿勢があり、物理的時間をもって測ることができなかったほど、民衆の生活に根ざした強さを指摘している。このことは円環的時間意識とし、ヨーロッパの直線的时间意識に対する日本人の時間意

識, すなわち歴史観への影響があるものといえる。空間についても, ヨーロッパでは都市の成立と呼応するように度量衡の単位を定め, 一定の枠をはめ, それにより空間・アジール(聖地)が消失し, 均質化されたとする。日本においては, 地鎮祭の例をとり, 神聖な空間を残し, 又, 方角を問題にするなど, 空間の質が違う意識を指摘している。人間と人間の関係においても, 貨幣経済の展開による貨幣を媒介とする人間関係のヨーロッパに対し, モノの贈与による人間関係の日本との違いを指摘している。又, 11・12世紀に, 直接的な贈与, つまり人間対人間の贈与はなくなり, 人間と人間の間に神がはいり, お礼は世話になったその人ではなく, 神に対してお礼をするように変わったとしている。そこに「公」的(普遍的)なものが成立する意識変革が生じたとしている。

こうした阿部氏の歴史観は, ハインバルの「生死を共に担う人間の新しい共同体」⁽⁹⁾として, 「歴史に働きかける人間の現在」⁽¹⁰⁾を「われわれの現在」⁽¹¹⁾として個人の意識や生き方に関心を置きながら, 現在をいかに生きるかという視点でみようとしているといえる。

一方, 高度経済成長期におこった日本の社会構造の変化と比較されるほどの転換期として, 南北朝内乱期を中心に中世社会を視点に, 基底の疑問を呈するのが網野善彦氏である。氏の主張を整理してみると, (1). 古代国家から一貫している「水田中心史観」への批判を通し, 日本史における非農業民への着目とマイノリティへの関心, ⁽¹²⁾(2). 広範な移動と遍歴による民の存在による, 東国・西国論⁽¹³⁾によって, 現代の管理社会への批判と, 単一民族とする日本の歴史の歪んだ歴史像に対する批判であるといえる。又, 平民たちの領主に対する抵抗を, 「保護」する支配者として, 公=オオヤケといわれた天皇を中心とする支配体制としての天皇制への問

題提起も中心的課題としている。

このような阿部氏, 網野氏の「公」についての指摘による我々の課題としては, 日本的「公」「私」の特異な構造を解明することが考えられる。

安永寿延氏の指摘によれば, 「『公』の概念が天皇および天皇への献身として固定されるのに対して, 「『私』の概念は, 民衆とその恣意性として規定される」⁽¹⁴⁾。また, 「いわゆる『衆の同共する所』としての『公』性が一方的に拡大されて国家へと凝結するとともに, 「『私』性をもっとも一面的に縮小されて個人と癒着する。一方, 公としての国家の意志を現実化する行政的レベルにおいては, 「『公』性が天皇を最高の頂点とする, 階層制的な官として人格的に具象化されるとともに, 「『私』性は, 個人の集合体とされる民へと流しこまれる。公私はこうに截然と分離される。だが, 公私のそれぞれの内部においては, 美的, 倫理的, 政治的価値づけが癒着していて, 公とは普遍性であり, 公正であり, 私は私欲であり, 恣意性であり, 両者はいざんとして上下の関係にあるとともに, 善悪の関係にある。こうして, 国家ないし官が公的原理を独占することによって, 個人ないし民の『公』性を剝奪するとともに, 個人や民に対して一方的に『私』性の烙印が押される」⁽¹⁵⁾として, 日本の特異性を指摘している。西欧における「パブリック」「レブブリック」が, 市民みずから設定した「公共性」である時, 日本においてどのように主体概念を確立する事と同時に, 市民社会をいかに築くかが我々の重大な課題として受けとめなければならない。そうした中で, 網野氏の基本的な言葉として「無縁」がある。「無縁」とは, 主従の縁や親族の縁が切られたところで形成される社会関係の原理であり, 切り離されて孤立した人々を, 「自由」な「平和」な場, 集団をつくり出す営みであるといえる。こうした「無縁」の場として, アジールの機能

を備えたものとして、「家」や中世自治都市であったことは、社会学的考察へのサジェスションを与えてくれるものといえる。

日本の現在の社会史が阿部氏、網野氏に代表されるように中世史を中心とする点で、近現代史からの社会史が待たれると共に自らが作らねばならないが、今日の社会問題が多出している状況は、1930年前後の日本社会史の出発点と似ている状況にある。

そこで、日本の社会史を溯行してみると、本庄栄治郎にあっては、社会史を歴史の一分科として考え、「社会（一定の土地を占有する人類の集合団体）が如何にして出来、又如何にして発達していくかということを研究するもの。つまり、社会組織の発生変遷を研究の対象とするが如き」⁽¹⁶⁾「社会問題の歴史」を考え、「実際に於て、国史上の重大なる出来事でも、常に当時の大政治家や武家将軍などの一挙手一投足の労のみで出来たものではない。それ以下の侍階級や町人百姓等が原動力となり、時勢の変転に乗じて事を成したものに過ぎない。然るに一方の階級のみを見て、他方の階級を見ざる如きは、実に史界の一大欠陥である。この欠陥を補うものは、社会史の研究を措て、他に之を求めることはできぬ」⁽¹⁷⁾としており、社会問題を全体的視点で捉え、社会史は為政者（支配者）の歴史ではなく、民衆（被支配者）の歴史を扱うものとしている。又、中村吉治においては、「家を基本にすえ、家から出発して国にいたるまで」⁽¹⁸⁾「一つは社会構造の単位の変化、とくに基礎単位の変化により、最終的に現代的個人が生まれるまでの歴史。もう一つは身分社会から階級社会への変化、つまり現代的階級社会が成立するまでの身分社会の変遷の歴史。」⁽¹⁹⁾としての二つの主題を基礎に、「民衆の社会の歴史、民衆の側からみた社会構造の歴史」⁽²⁰⁾であるとした。更に、「社会構造という、とりようによってはどうに

もとれるあいまいなものを、共同体という観点でとらえることに私の立場ははっきりしている⁽²¹⁾」と述べ、社会史研究を共同体史をふまえた共同体論にあることを明らかにしている。横山源之助の『日本の下層社会』も、「悉く目撃の事実」⁽²²⁾として、労働の現場をルポルタージュした社会史の方法を示したものといえる。このような傾向は、民衆・生活史の性格としてあり、〈労働〉と〈生活〉の視点からの社会史といえる。

とはいえ、社会史は民衆の歴史という場合、その民衆をどこに求めるかの問題が残ることになる。その場合当然の立場として、民衆の多数を占める部分に焦点をあてることになる。日本社会全般を論ずる場合には、農業を中心とする農民社会、とくに稲作農村を考察することが通例になっていた。たしかに、公地公民制や幕藩体制などに示されるように、権力の支配は、水田のある地域にかぎられていたことになる。しかし、網野善彦氏の水田中心史観に対する批判に重要な意味を認める場合、農民をもって民衆の代表とすることは適当でなくなることになる。氏の言う、遍歴漂泊の職人や芸人、また山民や漁民といったマイノリティーの非農業民に焦点をあてる場合、民衆の活動の場は、農村とは異なる共同体としての都市や山や海が、その基盤となる。しかし我々が民衆を対象とする場合、歴史的内容における民衆は一義的ではないが、民衆を歴史の主体として、生活と生産の場において捉えることには変わりないといえる。60年代以降も、高度成長による工業化が日本の隅々まで拡大される中、画一化に対しての多様化、中央に対しての地方として、地域の主体性が主張され、地域史や民衆史としての研究も広がっている。しかし、中央との関係を抜きにした地域史は、一時流行った“地域主義”のように矮小化されてしまう危険があることを留意してお

かなければならない。民衆の生活史や文化史、民衆意識論等の研究には、民俗学や文化人類学や社会学が大いに、積極的に取り組まなければならない。同時に、民衆をどう捉えるかは、今後の課題としたい。

(三)

それならば、同様に、民衆を対象としたヨーロッパの社会史についてはどうであろうか。〈社会史〉といえば、フランスのアナール学派が想起されるが、ヨーロッパ諸国の「社会史」といっても、歴史的背景も異なる上、方法内容においても一様ではない。

ドイツの場合

大野英二氏⁽²³⁾によれば、西ドイツ歴史学に大きな転換期が出はじめたのは、1960年代であるという。1930年代のナチズムの経験をどううけとめるかという問題に絞られる1964年のフィッシャー論争であるという。第一次大戦から第二次大戦に至るドイツ史における連続性の問題、つまり、ビスマルクからヒトラーへの連続性という問題を提示した大きな論争。この論争を契機に大きな転換が起こり、(1). ナチ・レジームや戦後の崩壊の経験により、伝統史学の信用失墜と、社会経済的变化を軸に政治文化を捉える社会史の台頭 (2). 亡命していた学者の帰国による貢献によって、政治学や社会学などの隣接社会諸科学の急速な興隆に影響され、これらの方法を歴史学が取り入れるようになった (3). ヴェイマル共和制とは違って、ボン共和制⁽²⁴⁾が、西ヨーロッパに開かれた姿勢をとり、社会史への関心が高まった (4). 特に60年代から70年代にかけて、政治的風土の転換と、フランクフルト学派に媒介された、マルクス・ルネッサンス (5). 世代交代(歴史学の教授)、をあげ、諸変化が起こり、社会史が台頭したと

している。つまり、伝統史学への対抗と、政治史に対する社会史として位置づけられるといえる。

フランスの場合

アナール学派の『Annales d'histoire économique et sociale』が、創刊されたのは、1929年である。その誕生の背景には、オーギュスト・コント以来のフランス実証主義哲学への批判として出発し、歴史認識における「現在」の復権としての位置づけがある。更に、史料のみにたよることなく、歴史家が生きた人間として、「人間の歴史」として「生きた人間」「人間社会」を対象とする「生きた歴史」でなければならないとした。それには、「現在による過去の理解」⁽²⁴⁾と「過去による現在の理解」⁽²⁵⁾とを相関的に認識し、人間行動の全体的把握としての「全体史」(histoire totale)への志向が必然なものである。そうした中で、アナール学派の代表的存在であるジャック・ルゴフは、1976年の日本講演で、人類学や社会学との交流を求めながら、新しい視点を明示している。それは、(1). 歴史を「長期的波動」、いわゆる長期的時間の幅において捉える考え方、(2). 日常的物質生活に重点をおいて捉える考え方、(3). 歴史を表面的にではなく、深層において捉える、という三つの視点から全体を秩序立てる概念を考えている。そして、このアプローチから、歴史における「身体」と同時に「心」の問題として、「もっとも変わらざるもの」の「心性の歴史」⁽²⁶⁾の重要性を指摘している。つまり、事件史や政治史には現われにくい、民衆の中にある欲求・感情・価値などの無意識の深層から、日常文化の意味や変遷に注目するものであり、「歴史における大衆の役割の最重視」から日常的人間への関心を中心とする視点である。こうした点を、ロベール・ミシャンプレは『16世

紀における魔術、民衆文化、キリスト教⁽²⁸⁾の中で描いている。こうした「心性」の概念に対しては、E・デュルケーム「集合表象」やレヴィ＝ブリュールの『未開人の心性』との交流が考えられる。更にこうした、「心性」が、「全体史」へと繋がることを考えると、マルセル・モースの「全体的社会事実」⁽²⁹⁾が想起される。モースの視点は、ポトラッチに代表されるように、ひとつの行動の体系や制度は、経済的・政治的・宗教的・心理的・道徳的などの多面から、心的なもの、社会的なものをも媒介させて考察されねばならないとする点である。又、「全体的人間」⁽³⁰⁾の観念は、生物学的・心理学的・社会学的との三重の視点により、幼児が、訓練されることを通し、学ばな⁽³¹⁾かで、生きる社会に適合していく「型の社会性」を「身体技法」として、身体の動きと社会を関連づけている点に、歴史的視点を示すものといえる。こうした、社会学等で問題とされる要素を含みながら、「深層の歴史学」の傾向を強めるのが、F・ブローデル⁽³²⁾である。彼の、『日常性の構造』では、日常生活の衣食住を扱い、日用の糧としての生産の仕方などを、人間を生き生きと描いている。その序説で、不透明な部分としての物質生活、透明な部分としての交易というような市場経済、そして資本主義と三層に分け、積み上げて、上層が変わっても、堆積した深層の歴史における底流は変わらないものとみている。つまり、物質生活——慣習やら日常性——の中での、食生活の意義や、主体としての人間がどのような衣服などを着ていたか、又、どのような住居に住んでいたかという、日々の生活が伝統にどう関係づけられるかを把えようとした点である。こうした流れの上に、家族史などがあるといえる。

イギリスの場合

G・M・トレヴェリアンの「社会史の対象と

なるものは、一国の住民の過去における日常生活⁽³³⁾」として、民衆の日常生活を通じ、その中から、民衆自身の歴史と文化の創造、あるいは労働運動といった、民衆のレベルによる、あるいは底辺からの制度史への反省としての性格によるものがあげられる。例えば、社会学において「階級」の概念は一義的に規定されていない状況であり、日本でも「均質化」が進行する中で、逆に明確になりつつあるが、抽象的な理論の世界のものとして、実感としては把えにくい概念であるといえる。ところが、イギリスでは、日常会話の言葉や、居住地域、パブ、趣味といった生活様式において明確に差異が存在し、経済的尺度のみでなく、文化的・生産様式の総てを包みこんだものといえる。そうしたことが、E・P・トムソンの「つくられると共にみずからをつくる」⁽³⁴⁾(was made and made itself)という労働者階級の意識が形成される過程を、生身の人間社会の内側から、歴史の主体を対象とする、労働運動史の伝統を引きついだものとしてあらわれている。更に、工業化に伴う都市化がイギリス人の生活をどのように変えたのかを都市史、民衆生活史として、生活社会史としての「下からの歴史」(History from below)として、社会史が位置づけられている。

こうした中であって、E・J・ホブズボームは過去10年ないし15年における社会史の関心のあったテーマとして⁽³⁵⁾、

(1). 人口統計学と親族関係、(2). 歴史研究に編入されるかぎりでの都市研究、(3). 諸階級と社会諸集団、(4). 「心性」あるいは集合意識あるいは人類学的意味における「文化」の歴史、(5). 社会の変換(たとえば近代化や工業化)、(6). 社会運動と社会的抗議の諸現象をあげている。また、社会史を三類型に分類している。第一は、「貧民あるいは下層階級の

⁽³⁶⁾歴史」とくには貧民の運動史(社会運動史), さらに専門化されたものとして「労働史」, 「社会主義思想と組織の歴史」。第二には, 人間諸活動の「風俗・慣習・日常生活」の歴史。第三として, 「社会経済史」そして, 社会の構造と変化の歴史, 階級及び社会集団相互間との関係の歴史である。この中で, 第三の類型に今後の発見の可能性としての「社会の歴史」⁽³⁷⁾としての社会史を目指すことになる。彼の言う「社会の歴史」とは, (1). 何よりも「歴史」であるから, 実際に起こった現象の趨勢と社会構造と変化の一般モデルとの協同研究であるという。(2). その場合, 社会学的概念で証明できる諸集団を対象とするものである。(3). 丹念な社会構造のモデルを設定するためにも, 研究の優先順位や作業仮説が不可欠なものとして, その優先順位は, 社会的生産の過程に置かれるとしている。そして, ホブズボームは, 労働者運動の成長と共に発展してきた草の根の歴史⁽³⁸⁾としての民衆運動のレベルから, 革命運動を考えようとする視点であるといえる。しかし, その「草の根」は, 横との連帯を形成する媒体を持ちえない時は, 単なる草の根でしかなく, いかにして媒体を用いてお互いの連帯を形成するかが重要な課題であるといえる。それには, メディア(マス・メディア)をいかに活用するかである。

(四)

以上から考察されることは, 近時の社会史は, 現代社会への批判を含め, 歴史とは, 社会とは, 人間とは何かを考えるきっかけを与えてくれ, 生き生きとした民衆の隠れている部分の掘り起こしとしての意味があるといえる。又, 民衆に深く根ざした意識の関係, 民衆のエネルギーを知るものとしての意味があるといえる。各々の国々の社会・文化の特徴を様々な角度から把えながら, 変わりやすいものと変わりにく

いものとの考察から, 普遍的な人類の変化を目指す視点の提示でもあるといえる。しかし, 一方で, 好事家らの趣味のように, 単なる読みものとして扱われないようにしなければならない点も注意しておかなければならない。つまり, 中世や, 古き良き時代へのロマンチズムとしてのみ, 感覚的, 感性的な把え方に流されてしまう危険があるといえる。この点は, 現在の感性的な中流意識と通じるものがあり, その反映ともいえるのかもわからない。更に, 歴史を科学として研究するには, 増田四郎氏が「為政者側の理念と庶民生活の現実とのギャップの分析」⁽³⁹⁾として「地域」の概念から「国家」「世界」へと連なる全体へつなぐ点を明示しているように, 社会発展のダイナミズムを把握せねばならない点を考慮しなければならない。つまり, 生き生きとした昔の人々の姿を静的に描くだけでなく, 個人が歴史を動かすという視点で, 歴史を学ぶのではなく, 歴史から学ぶ歴史としなければならないのである。しかし, 管理化され,⁽⁴⁰⁾基本的人権も侵されている現状では難しいともいえる。

こうした状況にあって, 社会史を方向づける点で, 服部之総は, 「客観的な現実の歴史はただ一つの歴史があるだけである」とし, 「大体総合史だの社会史だのというようなものは厳密には, ありようがないので, 総合史とか社会史とかいう名を付ける場合, 社会を構成するいろいろなモメント間の内面的な関係の全体の脈絡を見ることによってある法則に到達してしまえば問題はないが, 到達できない人々にとっていわば暗中模索的な一種の気休めの符合のように見える」⁽⁴¹⁾とし, 社会史を「究極において政治史にほかならない」⁽⁴²⁾としている。更に, 「ほんとうの歴史, 科学としての史述は, 未来を変革するほどの政治的洞察を過去に向かって適用して, 脚下の明暗を的確に現象することできな

⁽⁴³⁾ばならぬ」としている。日本における近時の社会史をブームに終わらせることなく、民衆の側からなる歴史の視点を明確にしながら、方法論的確立の道をさぐらねばならない課題を課せられているといえる。

ジャック・ルゴフは、新しい歴史学の未来に対し、歴史学と人類学と社会学の間での融合が起こることを期待している。それならば、社会学において、社会史の成果をいかに活用するかが次の課題となる。現時点では、従来の構造変動論の見直しとして、社会変動論、社会構造論の領域において活用が図られよう。以下において、社会学史における社会史、歴史社会学の展開を中心として、社会変動論を論じよう。

〈以下続く〉

(1986. 11. 25)

〈注〉

- (1) Christopher Lloyd, "Explanation in Social History" Basil Blackwell. 1986, p. 14.
- (2) その一例として、色川大吉「歴史の方法」大和書房, 1985年, 等がある。
- (3) C・W・ミルズ著, 鈴木広訳, 「社会学的想像力」, 紀伊国屋書店, 1978年, p. 193.
- (4) 家事労働もその対象とされている状況がある。
- (5) 同質化が進行する事は、異質なものが排除される過程でもある。こうしたことが差別へと繋がるといえる。
- (6) NHK世論調査部編, 「現代日本人の意識構造」第二版, 日本放送出版協会, 1985年。
同様に見田宗介著, 「新版 現代日本の精神構造」, 弘文堂, 1984年がある。
更に、同世論調査部編, 「80年代と日本人」, 同世論調査部編, 「日本人の宗教構造」がある。又、最新の世論調査では、増々, 「生活保守主義」が広がっているとの指摘がある。
- (7) 阿部謹也著, 「ハーメルンの笛吹き男」, 平凡社, 1984年。
- (8) 阿部謹也, 良知力編, 「社会史研究 1」, 日本エディタースクール出版部, 1982年, “ヨーロッパ

パ原点への旅, 時間・空間・モノ”。

- (9) (10) (11) 同上, p. 29.
- (12) 網野善彦著, 「日本中世の民衆像」, 岩波書店, 1980年, p. 73, p. 105.
- (13) 同著, 「無縁・公界・楽」, 平凡社, 1986年, p. 186。
同著, 「中世再考」, 日本エディタースクール出版部, 1986年, p. 117.
- (14) 安永寿延著, 「日本における『公』と『私』」, 日本経済新聞社, 1976年, p. 43.
- (15) 同上, p. 67~p. 68.
- (16) 本庄栄治郎著, 「日本社会史」, 改造社, 1947年, p. 17.
- (17) 同上, p. 17.
- (18) 中村吉治編, 「社会史 I」, 山川出版社, 1970年。
- (19) 同著, 「日本社会史 (新版)」, 山川出版社, 1980年, p. 3.
- (20)(21) 同上。
- (22) 横山源之助著, 「日本の下層社会」, 岩波書店, 1985年, p. 4.
- (23) 大野英二著, 「現代ドイツ社会史研究序説」, 未来社, 1982年, p. 207—209.
- (24) M・ブロック著, 「比較史の方法」, 創文社, 1978年。
同書, 高橋清徳氏による解説。
- (25) ジャック・ルゴフ著, 二宮宏之訳。「思想」, No. 630, 『歴史学と民族学の現在—歴史学はどこへ行くか—』岩波書店, 1976年。
- (26) 福井憲彦編, 「シリーズ ブラグを抜く, 5. “歴史のメトロロジー”」, 新評論, 1984年, p. 109.
- (27) 同上, p. 118.
- (28) 「魔女とジャリバリ」, 新評論, 1983年, p. 39~77.
- (29) マルセル・モース著, 有地亨訳, 「社会学と人類学」—「I」, 弘文堂, 1976年, p. 391.
- (30) 同上—「II」, p. 34.
- (31) 同上—「II」, p. 127.
- (32) フェルナン・ブローデル 著, 村上光房 訳, 「物質文明・経済・資本主義 15—18世紀, 1—1, 日常性の構造 1」, みすず書房, 1985年。
- (33) G・M・トレヴェリアン, 「イギリス社会史」, みすず書房, 1982年, P. 1.
- (34) Theda Skocpol, “Vision and Method in

Historical Sociology, The University of Chicago, 1984, p. 14.

- (35) Eric, J. Hobsbawm. "From Social History to History of Society", in "*Essays in Social History 1*". Clarendon Press Oxford. 1979, p. 12.
- (36) 同上, p. 2。
- (37) 同上, p. 9。
- (38) Eric, J. Hobsbawm, "History from Below—Some Reflections—", in "*History from Below*" Concordia University. Montréal, 1985.
- (39) 増田四郎著, 「社会史への道」, 日本エディタースクール出版部, 1981年, p. 243。
- (40) 一例として, 1986年10月14日の毎日新聞一面「祭神名票」による靖国神社への合祀事務が, 神社と厚生省, 都道府県との共同事業として行なわれていたことがあげられる。
- (41) 服部之総著, 「服部之総全集 16巻, 近代日本のなりたち」, 福村出版, 1974年, p. 16。
- (42) 同上, p. 17。
- (43) 同上, p. 18。

〈参考文献〉

- ・銅直勇著, 「社会学 上」, 明星大学, 1966年。
- ・角山栄・川北稔編, 「路地裏の大英帝国」, 平凡社, 1984年。
- ・川北稔著, 「洒落者たちのイギリス史」, 平凡社, 1986年。
- ・ジリー・クーパー著, 渡部昇一訳, 「クラス」,

サンケイ出版, 1985年。

- ・E・J・ボブスボーム著, 「資本の時代 I・II」, みすず書房, 1982, 1983年。
- ・福井孝男他編, 「フランス文学講座 5 〈思想〉」, 大修館書店, 1977年。
- ・「産育と教育の社会史」編集委員会編, 「民衆のカリキュラム 学校のカリキュラム」, 新評論, 1983年。
- ・同会編, 「生活の時間・空間 学校の時間・空間」新評論, 1984年。
- ・同会編, 「国家の教師 民衆の教師」, 新評論, 1985年。
- ・J・R・ギリス著, 北本正章訳, 「〈若者〉の社会史」, 新曜社, 1985年。
- ・イヴォンヌ・ヴェルディエ著, 大野朗子訳, 「女のフィジオロジー」, 新評論, 1985年。
- ・マルテース・セガレス著, 片岡幸彦訳, 「妻と夫の社会史」, 新評論, 1983年。
- ・ジャンニポール・アラン編, 片岡幸彦訳, 「路地裏の女性史」, 新評論, 1984年。
- ・浜林正夫著, 「現代と史的唯物論」, 大月書店, 1985年。
- ・浜林正夫著, 『社会史の方法をめぐって』「科学と思想」No. 58, 新日本出版社。
- ・石塚裕道, 「東京の社会経済史」, 紀伊国屋書店, 1977年。

(ももき ひであき, 本学助手)